



生涯学習センター教養講座 「府中の魅力再発見」

路傍の語り部 “いしぶみ（碑）” で学ぶわが町府中

～ふちゅうの歴史を刻む由来碑～ を企画して

府中市生涯学習ボランティア「悠学の会」プロジェクトチーム

府中の町は永い歴史を背負っています。その歴史は、古く多摩川の働きによって形成された河岸段丘の上に展開されてきました。永い歴史を語り継ぐ道しるべとして、府中市が、昭和 59 年以降、市内に設置した由来碑に着目し、市民の皆さんにわが町ふるさとの歴史や風土に親しみを持っていただける機会となればと願い、府中市ふるさと文化財課と協働して、全 3 回の講座を企画しました。

	月 日	テーマ	講 師
1 回	10 月 15 日 (木)	府中の地形～その生い立ちと地域の歴史を語り継ぐ～	和田信行氏 (ふるさと文化財課)
2 回	10 月 29 日 (木)	府中の道と人々～人・物・文化往来の歴史を語り継ぐ～	英 太郎氏 (ふるさと文化財課)
3 回	11 月 5 日 (木)	府中の地名～その変遷を語り継ぐ～	悠学の会プロジェクトチーム

府中市の由来碑は、現在、坂・橋・地名・道・渡しと 142 基設置されています。(設置場所、由来解説は府中市発行の「いしぶみ草紙～路傍の語り部たち」参照) 講座の 1 回目、2 回目は、府中市の専門職員による、地形にちなむ坂・橋と、人々往来の道についての解説でした。3 回目は、悠学の会プロジェクトチーム (10 名) による地名由来碑の現地探訪の報告です。とりわけ、新しい府中市誕生により、町名から消えた昔の地名の由来碑を訪ね、その由緒を調べ、今なお神社や公園の名前などにどのように残されているかを探りました。

講座の受講者は、91 名。この企画を実施する中で、プロジェクトチームのメンバーも、わが町府中についてたくさん新しい発見をし、学ぶことが出来ました。そして、学んだことを、市民のみなさんと共有できたことは大変意義のあることだったと感じています。

受講者のアンケートより抜粋

- ・府中に移住して 10 年くらい、こういう内容のお話を聞く機会がなかったので、大変興味深く聴講した。
- ・昭和 49 年から府中に住んで、初めて府中のことを知ることができた。良い講座を受講できた。
- ・ますますこの地に愛着を感じた。
- ・とても丁寧な講座で、特に資料が丁寧に作られていた。
- ・いしぶみウォークを企画してください。
- ・府中はいいところ、歴史もあり市政もよく、住んでいることに誇りを持っています。次回も楽しみ。
- ・郷土を愛し、探索する方の姿に敬意を表します。今後の活動に期待、応援します。

新宿由来碑
(宮町 1-8-5)



人見由来碑
(若松町 3-36)

「消えた地名の由来を訪ねて」 レポーターの感想

「悠学の会」プロジェクトチームの現地探訪では、府中市域を、旧府中町エリア・旧多磨村エリア・旧西府村エリアに分けて、メンバーが分担して由来碑を訪ねました。講座では、その結果をまとめて、画像スライドを交えながら、3名がそれぞれ25分の報告をしました。約1年にわたるみんなの調査と、何回かのリハーサルの努力の結晶でした。ここに各報告者の感想を記します。



プロジェクトリーダー、旧府中町エリア担当 宮原 英明

- 1 企画に当たって：市民協働を意識した講座の実践として、市との連携のもと実施に当たりました。
- 2 消えた地名の行方を追って：担当した「旧府中町」エリアのレポートでは、市制施行後の町名地番改正事業の結果、由緒ある地名が町名からは消えましたが、お祭りの山車など有為な形で伝承する取組みが行われており、それを実証事例で示すことができました。このことが、講座に足を運んで下さった方たちにとって、「府中の魅力再発見」になったとすれば、この上ない喜びです。
- 3 現地レポートをふり返って：一番大きな財産は、分担して現地レポートに当たったメンバーが、原典等の基礎資料をベースに、慣れぬ地域に何度も足を運び地域の識者や古老に由緒を訪ねて新たな発見をしてくれたことです。このことは、「悠学の会メンバーの魅力再発見」と言ってよいと思います。
- 4 今後に向けて：受講者の声にお応えできる講座の企画を目指す悠学の会メンバーのエネルギーを引き継いでいきたいと思っています。

旧多磨村エリア担当 佐藤 法雄

今まで足を踏み込んだこともなかった地域の由来を訪ね歩くことはとても新鮮でした。チームのメンバーからもらった資料の肉付け作業を進めていくうちに、見えてきたものは「江戸時代（綿が普及する）前の人々は、農耕作業（食）と麻織物作業（衣）に生活（人生）の殆どを費やしていた」ということと共に「綿」の普及が江戸文化の発展にいかにか大きな影響を与えたのかということに驚きを禁じえませんでした。

多磨川の豊富な水により稲作をし、岸辺に自生する苧（からむし）を原料に織りあげた麻布を川で晒す仕事を軸に発達して来た、消えた地名における暮らしぶりや由来を「過去から現在に至る時間軸の中でうまく繋げてレポートできないか」ということが私個人のテーマになりました。

背景にある「織物」というテーマは大きすぎて入れることは出来ませんでした。農耕に携わった人々や土地が、時代の変遷と共に変化してゆく姿やエピソードの一端だけでもレポートできたような気がします。

レポート作成に当たり資料や助言をいただいた府中市美術館、府中市郷土の森博物館、ふるさと府中歴史館のご支援に感謝申し上げます。

旧西府村エリア担当 相馬 典文

このエリアは、立川段丘崖（通称ハケ）から多磨川にかけての地域、現町名で日新町、四谷、住吉町、南町の地域です。多磨川が作った平坦地で、農村集落が点在し水利に恵まれた水田地帯でしたが、氾濫原でもありました。消えた地名は、三屋、間嶋（あいじま）、小野宮（おののみや）、中河原、下河原です。三屋以外の地名は氾濫によって作られた地形に由来したものでした。

地域は、現在は都市化して住宅地になっていますが、由来碑を訪ね、のどかだった農村風景と、そこに暮らす人々の生活を想像していると、豊かな現在の生活から離れて、素朴で、貧しくとも生き生きと暮らしていたであろう昔に帰りたい気持ちにもなります。消えた地名は、神社や、公園などいろいろな形で語り継がれ、中河原や下河原のように日常生活に密着した施設名称などになっているものもあります。

この活動を通じて自分の住む地域、府中市により一層親しみを感じるようになりました。府中市には142もの碑が設置されていて地域の由来を語っています。歩いていると、これまでは目にもとまらなかった碑に気付き立ち止まって見るが多くなりました。碑は身近なところにもあります。気を付けていれば碑が目にとまると思います。立ち止まってご覧になってはいかがでしょうか。

「生涯学習」この人に聞く その⑤

エチオピアの小学校で子どもたちを教えて 松下 優子さん

JICA 青年海外協力隊でエチオピア北部の町バハルダールに派遣され、約 2 年間、現地の小学校で音楽や日本文化を教えて今年 3 月に帰国し、今は府中市立本宿小学校で教壇に立たれている松下優子さんにインタビューしました。

Q 青年海外協力隊を志されたきっかけは？

大学 4 年生の時に小学校教師になろうと思い、大学卒業後、通信教育で免許を取得し、東京都で採用されました。最初は小平市の小学校に赴任し、その後、府中市に異動しました。学生の時から海外に行くことが好きで、海外で教師をすることが夢でした。府中市に移ってすぐ、JICA の教師海外研修に参加し、ラオスに行きました。そこで青年海外協力隊でいきいきと活動されていた幼稚園の先生に刺激を受け、私も「協力隊員になりたい！」という熱い志を抱き、文科省の現職教員特別参加制度の試験に挑戦し、夢を叶えました。

Q なぜエチオピアの小学校を？

最貧国で教師をしたかったからです。派遣前年度に国際協力関係の本を 370 冊読みました。その中に、新妻香織さんの「よみがえれフー太郎の森～エチオピアで希望を植えよう～」という本があり、とても興味をもちました。本の中で、エチオピアは緑が少なく、社会や学校教育の中で、人々に木を植えることから始めなければならないということが書かれてありました。日本とは全く異なる生活を送りながら、教師ができるという期待を、エチオピアに対して抱きました。

Q 小学校での指導の様子は？

派遣された小学校は、生徒数は約 2700 人、1 クラスは約 70 人の大規模校でした。音楽や図工などは重視されず、机上の勉強が中心でした。子供たちは、裸足の子がいたり、ボールペン 1 本とノート 1 冊だけ持って学校に来ている子もたくさんいたりして、最初の頃は、とても衝撃を受けました。私は、日本から持って来た鍵盤ハーモニカを弾いて歌を教えたり、折り紙や書道を教えたりしました。教室は写真のように、土壁が多く、窓にはガラスがなく、格子だけでした。自分から声をかけて、英語が分かるエチオピア人から現地語のアムハラ語を学び、3 か月で一人で授業ができるようになりました。

Q 子供たちは？

私の黒くない肌の色やカールしていない髪の毛が珍しかったのか、最初は私の手や髪の毛をよく触りに来ていました。子供たちは歌うことが好きで、エチオピア国歌、現地語、英語、日本語の歌を楽しみました。折り紙や書道などは、器用にできなかったですが、興味をもって取り組んでくれました。



グレード 1 (小学 1 年生) の教室です。小さい時に学校に来られなくて 15 歳から学んでいる子もいます。

Q 現地の生活はどんなふうでしたか？

冷蔵庫やガスのない生活でした。電気はあったのですが、停電になることが多く、家から学校までの道で、薪を拾い、火をおこし、炊事をしていました。主食は、テフという穀物を発酵させて焼いた「インジェラ」というもので、鉄分豊富で美味しかったです。野菜の種類が少なく、1 年の 1/3 が断食なので、肉を手に入られる時期に干し肉をよく作っていました。市場には徒歩で片道 50 分もかかりましたが、週に一度買い出しに行っていました。水にはとても苦労しました。家にペットボトルの水を買いだめしたり、屋外の水道水を夜中にケトルで沸かして飲み水にしたりしました。シャワーがなかったので、全身が一度に洗えず、ノミやダニに悩まされました。

現地では、出来るだけ多くの人とコミュニケーションをとるようにしました。エチオピア人の友達がたくさんでき、毎日家に呼ばれ、食事やコーヒーをご馳走になりました。エチオピアは経済的な発展や効率より、「人との関わり」を重視している国だと思いました。

Q エチオピアで学んだことは？

エチオピアでは、欲しい物がなかなか手に入りませんが、工夫して生活する癖が身に付き、「ある物を代用して使う」ということを学びました。今まで遠いと思っていた「アフリカ大陸」が身近にもなりました。また、この 2 年間で今まで見えなかったものが見えるようになった、という実感があります。それは何かな、とずっと考えていましたが、最近、気付きました。それは、エチオピアで文化も言葉も異なる中で、もがきながら生き、五感が研ぎ澄まされたからということです。エチオピアでの経験は、私の教師生活にとって、最高の宝物であり「精神の栄養」になりました。

取材後記：今年の卒業生のアルバムで、「自分のことを信じて強い気持ちでいれば必ず夢は叶う」というメッセージを送ったそうです。松下先生の強い信念と行動力、バイタリティーに感服でした。教室で子供たちはきっと元気と勇気ももらっていることでしょう。豊かな話題をいきいきと話された 2 時間のインタビューを、紙幅の都合で十分お伝えできなかったことは少し残念です。
(奥野英城)

皆さんは府中市のマスコットキャラクターをご存知ですか？ そうです「ふちゅこま」です。



ふちゅこま

今年9月に開催された、第22回府中市生涯学習センターのフェスティバルに登場してもらい、子供さんたちと握手をしたり、一緒に写真に納まるなど大変な人気でした。ところで、この「ふちゅこま」のモデルが大國魂神社の宝物殿に保存されている国指定の重要文化財「木造狛犬」だということは知っていましたでしょうか。

そこで、今回の「ふちゅう東西南北」はこの木造狛犬に焦点をあててみることにし、図書館にお願いをしてこの狛犬に関する資料を集めるだけ集めていただきましたが、残念ながら詳細な記述は、どの資料にもありませんでした。

それではと、大國魂神社をお訪ねして、狛犬についての情報を聞かせていただくことにしました。

お邪魔したのが11月の下旬でしたので、ちょうど七五三の時期と重なりお忙しい最中でしたが、権禰宜の早川眞由子さんが待っておられ、お話をお聞きすることができました。早川さんの説明によりますと、そもそも、狛犬は神社や鳥居の近くに置かれて、悪霊の侵入を防ぎ神社を守護する獅子形の像を言い、高麗犬や胡麻犬と表示されることがあるそうです。日本にある多くの狛犬は向かって右側が口を開いており「阿形」、左側がくちを閉じた「吽形」とよばれていて、「阿形」には角がなく「吽形」に角がついている像が多く見受けられます。もともと、中国から渡来したといわれる狛犬ですが、中国の像はどちらも口が開いている像が多く、阿吽になっているのは日本独特だそうです。これは寺に据えられている仁王像の阿吽を取り入れたものといわれています。重要文化財に指定され、宝物殿に保存されている木造狛犬も二軀一対の狛犬のうち、右側が阿形像で口を大きく開け今にも吠え掛かろうとしています。一方左側の吽形像は口を固く結んで、眼光鋭く身構えています。説明書には、阿形像の高さは70.3cm、吽形像は72.1cmで両像とも檜製の寄木造りとあります。宝物殿にご案内いただき、本物を見せていただきましたが玉眼、漆塗、金箔仕上げであった跡が一部に残っていました。この阿形像の胎内に納入された木札には、「紀州 根来/平之内正信作之/元和五巳未年 卯月吉日」の墨署名があり、元和5年(1619)に当時の江戸幕府作事方大棟梁で慶長年間に六所大明神と呼ばれた大國魂神社の社殿を造営した平之内正信の手によって作られ、本殿と拝殿の間にあった中門の両袖に置かれていたそうです。しかし、その作風からこの狛犬は鎌倉時代に作られたもので、運慶の作ではないかとのことで国指定重要文化財に指定されたといわれていますが、そのときのいきさつ等は、資料がなく分からないとのことでした。

そこで、もう少し詳細を知りたいと思い、府中市文化スポーツ部のふるさと文化財課・郷土資料担当主査の和田信行氏を訪ね、お話を伺ったところ、大正年間に、当時国宝などの調査と指定を担っていた「古寺社保存会」の技師の中川忠順氏が鑑定をし、その作風からこの像は鎌倉時代のものではないかと判定をされ、その結果昭和24年2月18日に国の重要文化財に指定されたとのことでした。



木造狛犬 (写真提供：大國魂神社)

しかし調べてみると、正保3年(1646)に本町から出火し、宿内三町を焼き尽くした府中大火で、森の中の六所宮にも飛び火して社殿は残らず消失してしまい、六所宮社殿の再興はこの大火から二十年を経て、寛文七年(1667)に行われたとあります。それでは、その大火の時に木造の狛犬はどうして無事だったのかと思ってお聞きしたところ、郷土史家の菊池山哉氏の書かれた府中市史史料集を見せていただきました。その史料集によりますと、慶長年間には本殿を挟んで左右に中殿があり、それぞれに狛犬がいたと考えられており、当時は三対の狛犬がいたと思われるとの事です。大火ではそのうちの一対は焼けてしまったが、幕末までは二対の狛犬がいたと考えられています。そして、明治に入り、大國魂神社に名を替えたときに一対だけにし、残りの一対は廃棄したのではと書かれています。しかし、本当に三対の狛犬がいたのか、一対は焼けてしまったのかは、いずれにしても想像の範ちゅうです。本当にまだまだ、謎の多い狛犬さんでした。

大國魂神社には、この木造の狛犬の他10対の狛犬がありますが、すべて石造です。中でも東照宮前の狛犬が一番古く、寛保2年(1742)に造立されています。それぞれに特徴のある狛犬たちで、見ていて飽きません。皆さんも是非一度ゆつくりと眺めてみてはいかがでしょうか。

(記：根岸 光紀)

(参考文献：府中市史・府中の風土誌・府中市の石造遺物・府中市史史料集)

企画・編集：府中市生涯学習ボランティア「悠学の会」

共同発行：府中市文化スポーツ部生涯学習スポーツ課

ふちゅう生涯学習センター共同事業体

〒183-0001 府中市浅間町 1-7

府中市生涯学習センター TEL: 042-336-5700

<http://fuchu.shougaigakushu.jp/>